

資料と証言 I

日中戦争期・朝鮮知識人の東亜協同体論

資料解題

戸邊 秀明

はじめに——翻訳の意図

1. 日中戦争の衝撃と朝鮮社会主義者の「転向」
2. 戦略的掛け金としての「東亜協同体」
3. 《翻訳》を通じた対抗
4. 封殺される言説空間

おわりに——《翻訳》の宛先

(以上、『三千里』11巻1号：小特集

「東亜協同体論と朝鮮」、1939年1月)

④徐寅植「文化における全体と個人」

(『人文評論』創刊号、1939年10月)

⑤朴致祐「東亜協同体論の一省察」

(『人文評論』2巻7号、1940年7月)

はじめに——翻訳の意図

日中戦争期に日本の左派知識人が唱えた東亜協同体論は、中国の抵抗に直面するなかで、日中提携の可能性を求めて東アジア国際秩序の再編と日本国内の社会変革を同時に志向した構想である。したがって基本的には抗日中国との対峙という状況から生まれたこの構想は、しかし主唱者たちの意図を越えて、異なる他者によって時をおかずして読まれ、仔細に議論されていた。ここに紹介する5篇の論説は、東亜協同体論を独自の意味づけによって自己の立論の戦略的掛け金とした朝鮮知識人の試みの痕跡である。訳出した5篇の構成は以下の通りである。

- ①金明植「建設意識と大陸進出」
- ②印貞植「東亜の再編成と朝鮮人」
- ③車載貞「東亜の新秩序と革新」

敗戦／解放後の日韓それぞれの知の枠組みのなかで放置され排除されてきたこれらの作品を、同時代の文脈に投げ返して新たな読みの可能性を創り出したい——このような意図から、私たちは数年前に小さな研究会をつくり、戦時期の日本／朝鮮の言論を突き合わせながら読み解いてきた。とりわけ戦時期日本思想史への批判を念頭に、戦時期朝鮮の思想動向を把握できる基本文献の日本語への翻訳と、それに基づく討議を重ねてきた。その結果、従来の日本史／朝鮮史双方の一国史的枠組みに基づく研究に対してのみならず、近年急速に進展する帝国日本の支配構造に関する研究潮流にも資する問題提起が可能であり、また必要と考えた¹。そこで今回は、そうした文献のなかから中核

¹ 日本植民地研究における政治・経済・思想の各領域での最近の研究動向については、これを植民地において「生きられた近代」への接近として概括した戸邊秀明「研究動向」ポストコロニアルリズムのインパクトと可能性——日本植民地研究とのかかわりで(『日本植民地研究』15、2003年6月)を参照されたい。

ともいえる5篇を選んで紹介したい。

私たちがこれらの作品に注目した契機は、参加者の関心から大きくは次の二つの方向を持つ。

ひとつは、戦時期日本の思想に関する研究が、当時対峙していたアジアの複数の他者との相互作用によって「日本」思想が作り出された経緯を無視する傾向を批判し、東亜協同体論や「世界史の哲学」・「近代の超克」論等を、他者との緊張した関係性のなかで批判的に読み直すとする関心と言える。この関係性の視点は、帝国の支配思想を研究すれば自動的に得られるのではなく、帝国の中心から発せられた言説の暴力に向き合わざるをえない様々な他者の営為の再構成なしには見いだせない。しかも東亜協同体論に顕著のように、一方の他者性への注視は別の他者の声を排除する可能性を内包する。朝鮮知識人の東亜協同体論を分析する作業は、こうした他者への感受性を、当時の重層する関係性のなかに探る反省の契機となり、「日本思想史」という言説の総体的変革を要請するはずである。

もうひとつは、「親日派」をめぐる議論に代表されるように、解放後の韓国の民族主義によって、植民地下朝鮮における諸実践の評価が二項対立的に裁断されてきたために排除された歴史を回復しようとする関心である。民主化以後、韓国では植民地期の「親日派」が米軍占領・韓国建国を通じて地位を維持し、今日の支配層に連続しているとの認識が広まった。だが、こ

うした韓国現代史の批判的刷新は、現実の政治的な対立や民主化運動にも流れる民族主義の潮流によって、単なる糾弾と二項対立の強化につながりかねない。そこでは、日中戦争期が持つ朝鮮知識人にとっての独自の意味や植民地下で進んだ特有の近代化が今日の韓国社会を深いところで規定しているという洞察は容易に切り落とされる。こうした状況に対して近年、「対日協力」や「植民地公共性」・「植民地近代性」(colonial modernity)等の概念を駆使して、朝鮮近代史の再検討が進んでいる²。私たちは、そうした研究動向に刺激を受けつつ、さらに「植民地近代性」論においても捉えきれていない、「近代の超克」をめざす戦時期朝鮮知識人の思想的営為を、彼らの東亜協同体論とのかかわりに探っている³。

ふたつの関心は、異なる方向から出発しながらも、脱冷戦・脱植民地化／脱帝国化を模索して揺れ動く東アジアにおいて、いかにして新たな関係性を作り出せるかという切実な問いを

² 松本武祝「『朝鮮における「植民地的近代」』に関する近年の研究動向——論点の整理と再構成の試み」(『アジア経済』43-9、2002年9月)、並木真人「植民地期朝鮮政治・社会史研究に関する試論」(『朝鮮文化研究』6、1999年)・同「朝鮮における「植民地近代性」・「植民地公共性」・対日協力——植民地政治史・社会史研究のための予備的考察」(『国際交流研究』5、フェリス学院大学国際交流学部、2003年)は、錯雑として誤解も少なくない(たとえば「植民地近代性」論と「植民地近代化」論の混同)。最近の研究動向を詳細に分析し、今後の可能性と課題を提示している。本稿でも「親日」に換えて用いている「対日協力」概念については、特に並木論文の提唱に拠る。また「植民地公共性」論の具体的展開については、尹海東「藤井たけし訳「植民地認識の「グレーゾーン」——日帝下の「公共性」と規律権力」(『現代思想』31-6、2002年5月)を参照されたい。

³ なお、言うまでもないが、「植民地近代性」論は「植民地の近代」のみならず、それをうちに抱え込んでしか成立しない「帝国の近代性」そのものを再考するように迫る点で、「日本」近代史研究を自任する者も疎かにできない問題のはずである。

共有している。その問いの試金石として、戦時期の思想の批判的捉え返しは不可欠である。

以下、このような関心を念頭に、いま、当時の朝鮮知識人の作品を読み解く際に最低限必要と思われる諸点にふれて、解題に代えたい⁴。

1. 日中戦争の衝撃と朝鮮社会主義者の「転向」

今回紹介する論説の執筆者5人は、何らかのかたちで社会主義の実践に携わってきた、30年代朝鮮における著名な社会主義者＝左派知識人であった。しかも、最年少の朴を除いた全員が、渡日留学→社会主義運動への参加→投獄という共通の経験を持つ。そのような彼らにあって、日中戦争とは自己の姿勢の転換を強いる巨大な衝撃だった。

彼らを含め、多くの朝鮮社会主義者が、日中戦争を契機に総督府の転向政策に応じ、主体的に対日協力を踏み出した。もちろん協力の度合いは一律ではないが、日本の大量転向と異なり、30年代半ばに至っても朝鮮民族の独立を求めて容易に転向に応じなかった獄中の彼らが、当時なぜ大量に転向を遂げたのか——この点への注目は、彼らの戦時下の文章を読み解く上で決定的に重要である。ここに、「日中戦争期」朝鮮の言論状況に注目する独自の理由がある⁵。

日本軍による緒戦の勝利は、朝鮮社会主義者の予想を裏切る事態だった。しかも1938年夏の日ソ軍事衝突（張鼓峰事件）に、日中戦争へのソ連の介入を期待した彼らにとって、戦争拡大を忌避して収拾を図った両国の妥協は、絶望的な現状の固定化と映った。またヨーロッパでも、スペイン内戦やミュンヘン協定により、枢軸国側が主張する国際秩序が容認されるかに見えた。中国大陆の戦況と国際環境の激変は、彼らの孤立感を一層深めた。

他方、戦争の長期化は、帝国内部における朝鮮の位置を大きく塗り替えていく。朝鮮は大陸に直結する地政的位置から「兵站基地」と想定され、総力戦に即応するための社会再編が強行された。兵站基地化は、一方で工業化や都市化を推し進め、現象的には朝鮮社会の（跛行的）近代化・発展の様相を生んだが、同時に物的動員と対をなして「人的資源」の効率的な活用が総督府・朝鮮軍によって意図され、将来の徴兵制導入も真剣に検討され始める。このために植民地権力が呼号したのが「内鮮一体」であり、朝鮮人の徹底的な同化を目標とする「皇民化」

主義者の大量転向の契機として日中戦争の画期性に注目し、転向者の数量的変遷と、東亜協同体論の導入によって彼らの論理が転換していく過程とを丹念に追うことで、「親日」として一括されてきた言動のなかに転向左派知識人による屈折した朝鮮自治論の継続を見てとる。なお「転向」という用語自体、「親日派」と並んで検討が必要だが、ここでは対日協力には一括できない社会主義の歴史的経験を重視して用いる。

⁶ 日中戦争期を含む1930-40年代における朝鮮の工業化・社会変容については、たとえばカーター・J・エッカート [橋谷弘訳] 「植民地末期朝鮮の総力戦・工業化・社会変容」(『思想』841、1994年7月)を参照。また中国占領地に進出する朝鮮人の動向については、木村健二・申奎燮・幸野保典・宮本正明「戦時下における朝鮮人の中国関内進出について」(『青丘学術論集』23、2003年10月)が最新かつ詳細な分析である。

⁴ 解題執筆にあたっては、研究会メンバーの先行する研究成果(注5・9・19・20の崔真碩・洪宗都・米谷匡史・趙寛子の諸論考)を全面的に参照・利用した。なお、先行研究への言及は(洪論文を除き)原則的に日本語文献に限った。韓国はもとより、英語圏での業績など挙げるべき研究は多いが、それらについては後日、あらためて紹介と検討の機会を得たい。

⁵ 洪宗都「日中戦争期(1937-41)朝鮮社会主義者の転向とその論理」(『韓国語』、『韓国史論』44、2000年12月)は、朝鮮社会

政策であった⁷。それらは基本的に官製運動であり、「創氏改名」に見られるように朝鮮人の様々な抵抗に遭ったのは当然である。だが、この段階で特徴的なのは、権力側の内鮮一体論に呼応して朝鮮人の側からこれを差別克服の方途として積極的に推進する動きが起こったことである。そこに見られた自発性は、歴史的な朝鮮民族性の一切を否定し、個々人の心情の位相に至る完全な日本との一体化を通じて差別の解消を図ろうとする徹底的な同化論（「徹底一体論」⁸）を生むまでになっていた。

こうした朝鮮内外の状況が、左派知識人の独立への希望を挫き、戦時動員による朝鮮社会の近代化に期待を寄せるよう誘導する効果を生んだことは想像に難くない。しかし、それだけでは、これまでの信念を捨てる契機にはなりえても、積極的な対日協力へと転回するための論理としては不十分である。知識人にとって対日協力とは、とりもなおさず言論その他の啓蒙活動によって朝鮮民衆を動員へと促すはたらきを持つ以上、人々を納得させ、自己を駆り立てる肯定的な論理が必要になる。徹底一体論者が説く朝鮮民族性の放棄は、民族性の確保をぎりぎりの抵抗線とする彼らには到底受け容れ難

いとすれば、内鮮一体論に規定された言説空間のなかで自己の言葉を見つけるのは至難だろう。この難問を解き、内鮮一体論のなかでこそ自分たちの主体的な議論と民族性の確保が可能になる鍵を、彼らは日中戦争下に発見した。これが大量転向の支点となる——それこそ、帝国日本が発した「東亜新秩序」の構想、なにかんぞく東亜協同体論の提起だった。

2. 戦略的掛け金としての「東亜協同体」

緒戦に勝利したとはいえ、中国の頑強な抵抗によって戦線膠着の状態に陥った日本政府は、これを打開すべく1938年11月3日、近衛文麿首相の声明をもって新たな戦争目的、「東亜新秩序」を打ち出した。極めて独善的に日本の利益を主張しつつも、日中提携による東アジア秩序の提言や西洋帝国主義の批判などの要素において、この声明は、もはや従来の侵略の方策が無効であることを示していた。他方で、声明は中国に向けてなされるだけでなく、新秩序形成を担いうる主体を形成すべく帝国を再編成する志向を打ち出した。

「新秩序」の内実をめぐる様々な構想が現れたが、なかでも左派知識人や社会運動家を惹きつけたのが東亜協同体論である。戦時期の錯綜する言説のなかで、この議論もまた全体主義や資本主義の評価等を軸に正反対の議論を擁していたが、いずれも「東亜」の革新を通じて広範な社会変革を実現しようとする志向を有していた。侵略と動員の推進力を元手とする危

⁷ 「皇民化」政策の意図や民衆の反応については、宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』（未来社、1985年）を参照されたい。

⁸ 玄永燮を中心とする徹底一体論者の同化の論理については、李昇煥「朝鮮人内鮮一体論者の転向と同化の論理——緑旗連盟の朝鮮イデオロギーを中心に」（『二十世紀研究』2、2001年12月）を参照。なお「内鮮一体」をめぐる朝鮮人の議論では、徹底一体論者はむしろ少数であり、同化の趨勢のなかでも朝鮮民族性の保持を採る「協和的内鮮一体論」が大勢であった。李論文は、両者の角逐と葛藤についても詳述している。今回紹介する5人は、転向した社会主義者の多くと同様、後者に位置づけられる。

うい議論とはいえ、従来の帝国主義の論理を越える「東亜」の国際秩序の樹立には、資本主義の問題を超克すべく「国内」の社会変革が必要とする論理は、尾崎秀実や三木清の論説に代表されるように、社会主義的変革の論理の戦時下における継続という側面を持っていた。しかも、こうした議論は抗日中国との応答関係のなかで編まれており、戦時動員のための帝国秩序の再編とも連動するがゆえに、帝国の中心にとどまらず、常にある種の越境的な言説空間を誘発した⁹。したがって、この言説空間は日中間にのみ現れたのではなく、「新秩序」をめぐる議論はいわば公共財として開かれており、それを利用して自分たちの社会の変革を期待しうる場となった。そして、これに素速く反応したのが、元社会主義者を中心とする朝鮮の知識人であった。1939年初頭から41年前半にかけて、今回紹介した『三千里』『人文評論』に限らず、『朝光』『文章』等の雑誌や新聞『朝鮮日報』『東亜日報』の学芸欄に多数の関連論文が発表されてゆく¹⁰。

朝鮮の左派知識人は、東亜協同体論にいくらかの可能性を読みとり、いかに自分たちの議論を展開するための戦略的な掛け金として領有

(appropriate) したのだろうか。その内実をうかがうのに、雑誌『三千里』1939年1月号の小特集「東亜協同体論と朝鮮」は重要な位置を占める。1929年創刊の『三千里』は当時の代表的な総合雑誌として、知識人をはじめ広範な読者を獲得していた。その雑誌が、「東亜新秩序」構想の発表、東亜協同体論の簇生と時をおかず、に組んだこの3論文には、朝鮮の左派知識人における東亜協同体論の主体的領有の意図と、それぞれの構想の差異がよく現れている。

まず寄稿した三者の経歴を簡単に確認しよう。

金明植は、今回紹介する5人のうち、唯一世代の異なる古参の社会主義者である。1891年、済州島朝天の名家に生まれた金は、渡日して早稲田大学専門部政治経済科に学び(1915-18年)、在東京朝鮮留学生学友会会長も務めた。20年、東亜日報社設立と同時に入社し主筆として活躍する一方、左翼青年団体であるソウル青年会結成に参加し、朝鮮労働共済会発起人・評議員、上海派高麗共産党の機関紙主幹などを歴任して運動の組織化に努めた。だが、22年、左派の雑誌『新生活』創刊に参加したため、社会主義思想宣伝を理由に検挙される。翌23年、朝鮮最初の社会主義者に対する裁判で懲役2年を宣告されたが、獄中で罹った病気のため同年7月に出獄。病の結果、身体が不自由となり、聴覚も失ってしまう。以後、評論家として活動するも、病気治療のため渡日(1928-36年)した大阪では再び検挙された。このような壮絶な経歴

⁹ 「東亜新秩序」声明へと至る帝国内の情勢や東亜協同体論の内包する様々な構想とその振幅については、米谷匡史「戦時期日本の社会思想——現代化と戦時変革」(『思想』882、1997年12月)・同「日中戦争期の天皇制——「東亜新秩序」論・新体制運動と天皇制」(酒井直樹ほか編『岩波講座・近代日本の文化史7 総力戦下の知と制度』岩波書店、2002年)を参照されたい。

¹⁰ 各雑誌の性格や書誌的事項、日中戦争期の論調の相違については、さしあたり林鍾国「大村益夫訳『親日文学論』」(高麗書林、1976年)3章1を参照。ただし詳細については、今後、掲載された各論考の分析による再検討が必要である。

から、今日でも金は朝鮮社会主義運動の（非主流派ながら）先駆者の一人と位置づけられている。しかし 36 年に朝鮮に戻った金は、日中戦争期には朝鮮経済論を軸に「内鮮一体」のもとでの発展を模索して健筆を揮う。

掲載順とずれるが、生年では車載貞が印よりも早い。車は 1903 年、忠清南道論山に生まれ、商業学校卒業後は農工銀行に勤務したが、21 年に渡日して東京正則英語学校を卒業、さらに明治法科大学にも 1 年間在籍した。23 年に帰国後は、学校教師、保険会社職員として勤めるかたわら、25 年にソウル青年会に参加、翌年には朝鮮社会団体中央協議会の創立準備委員にも名を連ねたが、29 年、光州学生運動で逮捕され服役した。転向後は 36 年に転向者団体、大同民友会の創立者の一人として理事に就任する。日中戦争期には総督府の転向政策に協力し、以前の「同志」に転向と対日協力を働きかける役割を担った中心的人物である¹¹。経歴に明らかのように、思想家というよりは活動家の側面が強い。

三者のうち、とびぬけて長文の論説を寄せたのが印貞植である。印は 1907 年、平安南道龍岡に生まれた。25 年に渡日して法政大学予科に入学、在学中に朝鮮共産党日本総局に入り、高麗共産青年会日本部では責任秘書も務めたが、

治安維持法違反で検挙され入獄した（1929-34 年）。出獄後は民族紙『中央日報』に拠るかたわら、在野の農業経済学者として講座派マルクス主義的な視座から朝鮮農業社会の矛盾を究明し、37 年には代表作『朝鮮の農業機構分析』（白揚社）を著す。だが 38 年に再逮捕されると、転向を声明して出獄。日中戦争期には農業経済論を軸として多数の論説を発表し、対日協力のイデオログ的存在となる¹²。同時に「内鮮一体」を掲げる日本語雑誌『東洋之光』編集委員、総督府の朝鮮国土計画委員にも就き、実際活動でも植民地権力に協力する態度を示した。

三人の元社会主義者は、経歴や活動を異にするも、39 年年頭の論説では興味深い一致を見せている。それは以下の三点に要約できよう。

まず、日本軍の中国侵攻によって暴力的に構想される「新支那建設」を、「東亜新秩序」実現の基礎として積極的に肯定している。ただし現実の追認の裏面では、「諸民族共存共栄による共同秩序」の原理である東亜協同体論を引き合いに出しつつ、「東亜新秩序内に包括される諸民族社会は、その自主的利益が尊重され、個性、伝統、文化が等しく尊重されなければならない」（車論文）ことを強調する。そこには明

¹¹ 日中戦争以前に明確な転向を表明した点で、車は、今回紹介する他の 4 人とは異質な人物である。実際、車にとって「革新」のイメージは 226 事件に端を発しており、彼の構想は大アジア主義的な国家社会主義に接近している。そのため、転向後の役割や思想において、佐野学と類似する点がある。

¹² 印貞植の朝鮮農業社会分析の視角と対日協力の論理との連続性については、松本武祝「植民地下の朝鮮人はいかに統治されたか——日本「帝国」の意図せざる統合原理」（『情況』8-10、1997 年 12 月）・同「戦時体制下の朝鮮農民——『農村再編成』の文脈」（『歴史学研究』729 [大会増刊号]、1999 年 10 月）を参照。なお、解放後の著作まで含めた大部分の論考は、『印貞植全集』全 5 巻（ハンウル；ソウル、1992 年）にまとめられている。

言はないものの、東亜協同体論を朝鮮に適用するならば、朝鮮の民族性もまた保全されるべきだとの意図が透けて見えよう。内鮮一体論が差別の解消を掲げ、「東亜新秩序」が帝国主義的野心を批判する以上、朝鮮は日本との〈帝国—植民地〉の関係を越えて「協同体」の構成要素となりうると考えられた¹³。

第二に、こうした展望を可能にする根拠として、国内革新への強い期待が鮮明に現れている。車が執拗に繰り返すように、反資本主義的・反帝国主義的な「日本の国内革新」が「東亜新秩序の内面的要素」として不可欠であるとする日本の左派知識人の認識は、朝鮮でも鋭敏に受け止められていた。しかもその期待が、植民地を含めた帝国規模の社会変革の展望へとつながっていることは、繰り返し現れる「国内における新秩序」という際の「国内」が朝鮮をも含んでいる点に明らかである。彼らは「国家権力における革新勢力の増長の必然性」（印論文）に意を強くして、総督府の押しつける「内鮮一体」の論理を、朝鮮をも戦時革新に包含させる回路として積極的に読み替えようとしたのである¹⁴。

第三に、このような戦略をとる根拠に、朝鮮の急激な社会変容の肯定と民衆の戦争支持を想定している。印論文はそうした変化を、事例を挙げつつ体系的に論証してみせる。朝鮮農業の封建的要素の払拭と近代化を熱烈に希求する印には、戦時工業化と急激な人口移動は農業再編成への具体的光明と映った。同時に統制経済の進展は、朝鮮の近代化が資本主義的發展ではなく、集産主義（collectivism）的組織や大規模な反資本主義的社会工学（計画化）の導入を必然化させ、朝鮮内部の社会問題を一挙に解決するのではないかと期待された¹⁵。そして帝国の軍事的侵攻から得られる利益によって、朝鮮民衆は国民的自覚を促され、帝国の主体としての地位を要求しうるまでになりつつある——これが彼らの基本的観測だった。ならば「われわれは、新東亜協同体の建設に対して特別な関心と熱意をもってそれに積極的に参加し、新運命の第一歩を開拓しなければならない」（金論文）。

であるため、この革新勢力の抬頭の必然性において、内鮮一体の必然性をみるのであります。なぜそう言うかということ、殖民地としての朝鮮を完全に止揚し、朝鮮民族と大和民族を合わせ、一個のより高級な概念をもった新日本民族へと統一することができるからです。／ここで注意すべきことは、新日本民族へと統一するということは、決して朝鮮人がその民族的な固有性全般を喪失しなければならないということでは、絶対にありません。朝鮮民族の固有な言語、文化、伝統、民族精神等のこのようなものは、新たに形成される新日本民族の生活の一部の面として最後まで保存され、また発達されなければならないでしょう」（訳は渡辺さりなによる）。

¹⁵ 社会主義もまた開発主義的志向を強烈に宿している。しかし、植民地の知識人が社会主義を求めたのは、単に宗主国が与えない開発の技術的知識を提供してくれるからではなく、自分たちを抑圧してきた帝国主義と資本主義を基調とする近代そのものから跳躍して、新しい文明の主体になれるという方向性を、社会主義が指示したからである。ここに、朝鮮の元社会主義者が「近代の超克」＝「革新」に切実な関心を寄せた根拠がある。

¹³ もっとも、日本との関係をめぐっては三者の差異も大きい。自立性の保持については、車は関心が希薄であり、むしろ皇道主義を鼓吹している。だが車でさえ「今日の日本精神、または日本主義は、もう少し近代化した普遍的体系を有しなければならない」と注文を付けざるをえないほど、実際のイデオロギーは偏狭なものではなかった。対して一見、皇道主義に帰依しているように見える印は、「皇室」を称える際にも、それを「皇室と人民間のみ差別を是認する」、すなわち「内鮮」の完全な平等を主張するための武器に用いている。

¹⁴ こうした意図は、小特集が掲載されたのと同じ『三千里』39年新年号に掲載された座談会「時局有志円卓会議」における印の次の発言に、より明確に現れている。長文にわたるが、民族性の保持を明確に志向している点など、印論文を読む上でも重要な参照となろう。「革新勢力は反資本的であり、また反搾取的

これら三つの志向が指し示す究極の意図とは何か。この点でも印論文は、周到かつ大胆だと言えよう。帝国内における朝鮮の自立性の承認を要求し、戦時動員をバネにした朝鮮の発展を期待するだけでなく、さらに進んで「内鮮一体」が求める「国民的義務」を果たすことで、「内地民族と同等の」政治的権利を獲得しようという展望がある。帝国の主体（それはもちろん暴力の主体でもあるのだが）となることで、朝鮮民族の「運命」は「生存と繁栄と幸福」を約束されるというのだ。

こうした戦略性は、社会主義者の経歴を持つがゆえに設定可能であることに留意したい。東亜協同体論は、戦時変革の推進力を通じて、彼らが社会主義者の時期以来課題としていた朝鮮の民族問題と階級問題の両方を解決する方途として、二重に肯定されたのである。その方途の戦略的設定は、印論文の末尾に引かれた「ラ・マルセイエーズ」の一節が象徴している。その一節は、彼らが社会主義者の時代に抱いた願望が、この時点でも文字通り歌の調べを変えて（*changing song*）継続していることを示唆する。おそらくは社会主義者の頃に革命歌の一種として暗唱した詞を、朝鮮民衆に帝国への忠誠を促す呼びかけとして引くところに、複雑に屈折した転向のさまが見てとれる。と同時に、この引用は、文脈は異なっても同じ詞を歌い、変革の呼びかけはなしうるとの印の自負をさりげなく表しており、この点では印の転向は権力への屈従という単純な像では捉えられない屈

強な戦略的発想に裏打ちされている。

もちろん、連続性は他方で、その負の側面も露わにする。決然と方針を示し、状況に主体的にかかわることを朝鮮民衆に呼びかけるそのスタイルは、彼らが以前従事した運動の実践様式からの継続を明確に示すとともに、民衆の指導を当然とする指導者観を如実に表している。朝鮮民衆の多様な願望を根拠に、かえって民衆を戦争に動員し、被植民者の自発性を調達するための格好の論理を提供しているとも言えるのだ。しかも帝国の能動的主体として自己と朝鮮人全体を提示することで展望される朝鮮発展の青写真は、とりわけ「満洲」・中国との関係では複雑な位相を持たざるをえない。印の示す帝国の主体の一員としての中国に対する優越の感覚はもちろん、金が期待した日中両国間での「蝙蝠」から調停役への脱出にしても、そこには日本人以上に屈折した対中感情がはらまれていた。したがって印たちの作品を読むには、転向から抵抗へと評価を反転させるのではなく、自立・発展の模索そのものが帯びる暴力性をも批判の射程に据える注意深さがまずは要求される。

以上からは、「東亜」の革新を通じて朝鮮社会の自立性を維持し、資本主義・帝国主義を超越する発展の可能性を模索しようとする姿勢が浮かび上がるだろう。朝鮮における東亜協同体論は、中国のナショナリズムへの応答として提示された東亜協同体論を、内鮮一体論を読み替える挺子として導入し、内鮮一体論を「東亜」

における民族協同の理念へとたぐり寄せ、民族性の抹殺をくい止めようとする主張であった¹⁶。しかも、東亜協同体論は植民地権力に対する防波堤としてではなく、積極的に民族・階級問題の「革新」を語りうるからこそ受容されたのであり、それによって社会主義的志向を新たな方向に転軸できると考えられたのである。

いかに暴力的・独善的な位相を持つといえども、それは歴史的に系譜づければ朝鮮における脱植民地化の実践の屈曲した表現であり、日中戦争期にのみ可能な論理構成と権力との緊張関係を保持していた¹⁷。しかも、朝鮮における東亜協同体論の領有は、皇民化政策への批判的応答や朝鮮内の徹底一体論者に対する攻撃にとどまらず、帝国主義の暴力へのより根源的な批判をも内在させていたのである。

3. 〈翻訳〉を通じた対抗

東亜新秩序をめぐる帝国の種々の構想のなかで、最も包括的・哲学的な議論を展開したのは、京都学派の哲学である。これには左派で東亜協同体論の論客である三木清の議論から、「種の論理」を構想した田辺元の哲学、西田幾

多郎周辺の少壮哲学者・歴史家たち（高坂正顕・高山岩男・鈴木成高・西谷啓治）によるいわゆる「世界史の哲学」の動向まで、複数の流れがある。とりわけ三木の議論と後二者との差異は大きい¹⁸が、従来の個人主義・自由主義を批判し、文明史的な哲学史観を体系化している点で、ともに大きな影響力を言論界に及ぼした。

朝鮮でも、東亜新秩序を弁証する哲学的議論として、これらの議論は受容された。だが検討や解釈を経て、東亜協同体論や内鮮一体論それ自体が問い返されていく。その過程は日本→朝鮮への一方的影響というよりは、朝鮮知識人による、ある種の〈翻訳〉による積極的な領有であり、他者の論理の内側を通った批判が展開される。いわば〈翻訳〉を通じた対抗ともいえるべきその議論の内実は、雑誌『人文評論』に掲載された徐寅植と朴致祐の論説に明らかである。

『人文評論』は1939年10月、雑誌統制が厳しくなる時期にあえて創刊され、当時、純文学色のより強い『文章』と並ぶ文芸・評論誌となった。発行元の人文社の編集兼発行人であった崔載瑞（1908-64年）が、後の雑誌統合後も『国民文学』編集長を務め、著書『転換期の朝鮮文学』（人文社、1943年）では第2回国語総督文学賞を受賞したため、『人文評論』は「親日文学」として顧みられない場合が多い。しかし、すくなくとも発行当初は、総督府に迎合を示しながらも、内鮮一体論の批判的読み直しを模索し、それを可能にする執筆者を誌面に登場させた。とりわけ崔が強く推したのは、まだ30

¹⁶ この点は、朝鮮において展開された東亜連盟論とも重なる志向性である。東亜連盟論は元来、東亜協同体論に比して民族の固有性を尊重する傾向が強く、帝国の中心では「東亜新秩序」の基本構想において両派は鋭い相違を見せた。しかし朝鮮においては、両派の論理は民族性の維持・発展という共通する関心から領有されたと言える。朝鮮知識人の東亜連盟論については、松田利彦「植民地末期朝鮮におけるある転向者の運動——姜永録と日本国体学・東亜連盟運動」『人文学報』79、京都大学人文科学研究所、1997年）を、また東亜連盟論と東亜協同体論の植民地における異同については、米谷前掲「日中戦争期の天皇制」を、それぞれ参照されたい。

¹⁷ ここに、尹海東前掲論文が名付ける「グレーゾーン」（植民地権力との多様な抗争と交渉の場）の存在を指摘できるだろう。

代前半の二人の哲学徒、徐と朴であった¹⁸。

同誌創刊号の巻頭論文の著者は徐寅植であった¹⁹。徐は1906年、咸鏡南道咸興に生まれている。24年に渡日、早稲田大学文学部哲学科に在籍し、現代哲学の革新的潮流に接した。また東京滞在時から新興科学研究会、新幹会東京支会、朝鮮共産党日本総局、高麗共産青年会に参加し、印貞植と党活動をともしている。28年に大学を中退、翌年には中国で朝鮮共産党再建の方針を協議し、朝鮮に戻ってからは再建活動に奔走した。しかし33年、朝鮮共産主義協議会事件で逮捕、懲役5年を宣告される。したがって彼の執筆活動は37年出獄後のわずか4年に限られるが、その明晰さから論壇登場後すぐに注目を集めるようになった。

また同誌の事変3周年記念号の巻頭を飾ったのが、朴致祐の論文である²⁰。朴は1909年、咸

鏡南道端川に生まれた。33年、京城帝国大学法文学部哲学科卒業後、崇実専門学校（在平壤）の教授を経て、36年に『朝鮮日報』の学芸部記者となる。並行して34年から、朝鮮の論壇で現代哲学の紹介と批判を含む多くの論文を発表して注目される。朴は今回紹介する五人のうち、唯一、日本留学の経験がなく、植民地の帝国大学を卒業後、教員を経てジャーナリズムに入った。それはアカデミズムに閉じこもる哲学的議論を強く批判し、哲学の実践性を賦活するためだった。徐と朴では、朴の方が発表媒体を意識して挑発的な言辞を忍びこませるなど、読者を意識した議論を展開している。また唯一逮捕歴がなく、社会主義運動とのかかわりも明らかではないが、当時から左派知識人と見られていた。

二論文は、先行する印貞植らの東亜協同体論や、京都学派の哲学と対質させることで、より鮮明に位置づけられる。

両論文の中心的関心は、全体主義を批判し、他者性や理性の擁護を通じて東亜協同体論や内鮮一体論を原理的に批判しうる核心を掴むことにあると言えよう。むしろ、『三千里』の小特集掲載の時点から一層動員と統制に拍車がかかったこの時点で、「内鮮一体」の公準そのものは否定できない。しかしここでも、「問題の国内新秩序もあくまで国民の自主と創意を基礎とした一種の民族協同体とならざるを得ない」（徐論文）とされるように、「国民」（日本・植民地人民を含む）内部における多民族の

¹⁸ 両論文を掲載した号の編集後記では、2人を高く評価し、期待を寄せている。特に朴論文については「特集に応える朴致祐氏の『東亜協同体論の一省察』は、東洋の運命と新秩序の原理について我々がもっている最高の知性が、良心をかけて討究した論考である。甚に横行する無責任な協同体論と同一視されることを前もって警戒しておく」と掲載の意図を示唆している。

¹⁹ 徐寅植の哲学的議論については、趙寛子の以下の研究を参照されたい。趙寛子「日中戦争期の『朝鮮学』と『古典復興』——植民地の「知」を問う」（『思想』947、2003年3月）・同「植民地帝国日本と『東亜協同体』——自己防衛的な思想連鎖の中で『世界史』を問う」（『朝鮮史研究会論文集』41、2003年10月）・同「徐寅植の歴史哲学——世界史の不可能性と私の運命」（『思想』957、2004年1月）。趙はこれらの論文によって、徐が展開する「世界性の世界」の議論が、ラディカルな資本主義批判を基礎にしていることを他の論者と対質させて明らかにし、朝鮮の東亜協同体論における徐の孤絶ともいえる独自の位置を浮かび上がらせる。また本稿が垣間見た徐の哲学と京都学派の差異については、特に趙前掲「徐寅植の歴史哲学」を参照。

²⁰ 朴致祐の本論文については、崔真碩「朴致祐における暴力の予感——『東亜協同体論の一省察』を中心に」（『現代思想』31-3、2003年3月）が詳細に分析している。特に三木清の論理との異同を検討して東亜協同体論の日本・朝鮮における差異を指摘し、他者性の問題を鋭く問いかけている点は、今後、東亜協同体論を分析する際に不可欠な視角である。

自主・協同へと「内鮮一体」像を方向づけようとする。しかも全体主義の非合理性や、有機的
一体論による民族主義が東亜協同体論と矛盾
することを見抜く視点は、車や印が皇道主義へ
と接近する姿勢をも批判する位置にある。また
全体主義が個人主義を機械的に否定する風潮
を、むしろ「封建主義にすぐさま逆行する」反
動と喝破（徐論文）し、あるいは「革新思想」
と踵を接して非合理主義の必然性を説く哲学
史観を「振り子史観」と揶揄する手捌き（朴論
文）には、京都学派（とりわけ「世界史の哲学」
の一派）への明確な否の主張がこめられてい
う。

見誤ってはならないのは、こうした批判が全
体主義や協同体論出現以前のヒューマニズム
や国際主義のような立場から論じられている
のではなく、むしろ全体主義が登場せざるを
えない現代世界の原理的矛盾を突破するため
こそ、選択されている点である。その矛盾の哲
学的分析において、徐・朴の両者は、確かに京
都学派の論理に接近しており、ナチス流の全体
主義・民族主義を批判した同時期の三木の議
論や田辺哲学から援用した概念も、少なからず
用いられている。しかしいずれも、当時ま見ら
れた現代哲学の咀嚼を目的とした論文ではな
い。当面する世界史的な問題点・限界を指摘す
るために京都学派や全体主義の論理を俎上に
のせ、かえってその問題点や矛盾を明らかにす
る論法を採っている点にこそ注目すべきだろ
う。

では、この微妙な差異を生む岐路には何があ
るのだろうか。

ひとつには、徐論文にはっきり現れているよ
うに、唯物史観と京都学派流の歴史的存在論と
の緊張関係を保持しながら、ふたつながらに内
なる格率とする態度に求められよう。徐が展望
する「世界性的世界」は、「無的普遍」など西
田哲学の用語を塗しながらも、「世界構造の改
造問題」とりわけ資本主義の克服を射程に収め、
その根拠に、個人主義を越える「人間労働の社
会化」の段階に社会が到達したとの認識を置く。
こうした史観は、二つの歴史哲学を対質させ、
とりわけ京都学派流の歴史哲学に掣肘を加え
ることで、新たな全体性の獲得を目指す志向を
伴っていた。これが単なる哲学史観の論証では
なく、政治的問題であることは、「歴史的転機」
に遭遇したにもかかわらず、それを主導する主
体的力量を、「東亜」の指導者を（三木清でさ
え）自負する日本が持ちうるのか、との反語で
論文末尾を結んだ時点で、徐自身、明確に意識
していただろう。

二人の論文には、印たちのように帝国の正当
な主体としての資格を欲望する衝迫は希薄で
ある。これは両者が論文を執筆する時点では、
早くも「東亜新秩序」構想の無力さと非現実性
が露わになっていたという事情も作用してい
るだろうが、より留意すべきは、帝国の主体と
なることがはらむ暴力について、原理的な思考
による批判的姿勢を保持できたことだろう。こ
の点は、朝鮮の他の東亜協同体論のみならず、

三木らが前提としていた「東亜協同体の指導者としての日本」という位置をも鋭く問いつめる質を持っている。とりわけ朴が「円周を異にする他者」の存在を喚起することで突き出す問いは、東亜協同体論を梃子とした「内鮮一体」の同化圧力への批判を越えて、東亜協同体論そのものの存立を揺るがす力を秘めていた。「運命」の概念についても、東亜協同体論を補強する提言のように差し出しつつも、それを（日本が）どのように現実的な「使命」として実現しうるかについては、朴自身、同時代の現実のなかでは展望を語ろうとはしていない。

4. 封殺される言説空間

以上のような試みも、1940 年後半から翌年春にかけて閉塞を余儀なくされる。日本では革新派による新体制運動が既成勢力との抗争に破れ、諸勢力の妥協の結果として社会経済の根本的再編なき統合と動員の体制がつくられてゆく²¹。朝鮮でも統制に拍車がかかり、もはや東亜連盟論はおろか東亜協同体論を梃子に内鮮一体論を「内鮮平等」の希望へと読み替えるいかなる余地も許されなくなった。ここに朝鮮独自の意味での「日中戦争期」の言論状況は終息を迎える²²。

これ以降、五人の著者はどのような軌跡を歩むのだろうか。金明植は 40 年半ばには筆を断ち、43 年に故郷で貧窮のうちに没した。車載貞は、45 年 8 月の解放まで大同民友会の領袖として積極的に対日協力の活動を行ったようだが、解放後の事績・没年も含め、不明な点が多い。

興味深いのは 1900 年代後半生まれの残り三人の軌跡である。徐と朴は、前述のようにまさに言説空間が閉塞するこの頃、そろって筆を断ち、戦時中は沈黙を続ける²³。これが自発的な執筆拒否によるのか確認できないが²⁴、乏しいとはいえ存在した批判の可能性さえ奪われた以上、彼らは言葉を失うほかなかった。対して印は、むしろ饒舌に動員の論理を語っていく²⁵。もはや印にしても民衆が自発的に帝国のもとでの繁栄を直覚していると言っている状況はなく、農村の窮状は深刻の度を増していた。しかし、そうであればこそ印は一層、持論である朝鮮の封建制の打破を戦時経済による構造変動という主体的要因に求めざるをえず、ますます動員—協力の論理にがんじがらめになって

報日本現代史 7 『戦時下の宣伝と文化』現代史料出版、2001 年）。

²¹ 確認できる限りで解放以前の最後の執筆は、徐が 1940 年 11 月、朴が 1941 年 6 月発表の作品までとなっている。

²² 左派知識人にとって、そもそも物理的に執筆が難しくなる状況が生まれていた。40 年 8 月 10 日には日刊紙『東亜日報』、『朝鮮日報』が強制的に廃刊、41 年 5 月の雑誌統制では 21 誌の朝鮮語雑誌が廃刊・整理統合となった。『人文評論』は『文章』と統合され、41 年 11 月、『国民文学』として再出発を果たすが、同誌は翌年半ばには完全な『国語雑誌』を譲うに至る（林前掲書参照）。また 41 年 3 月、日本本国に先駆けて朝鮮で予防拘禁制度が施行されている（参照、水野直樹『戦時期朝鮮における治安政策——「思想浄化工作」と大和塾を中心に』『歴史学研究』777、2003 年 7 月）。治安政策と言論統制の連関、およびその日本—朝鮮間での展開と差異については、今後の検討課題である。

²³ 印は 40 年代中、転向後の代表作『朝鮮農村の再編成』（人文社、1943 年）等 4 冊の単著（うち 1 冊は増補版）を執筆・出版するほか、矢継ぎ早に論説を発表していく。

²¹ 革新派がヘゲモニーを喪失する過程については、米谷前掲『戦時期日本の社会思想』を参照。

²² もちろん、朝鮮知識人のすべての抵抗が収束したわけではない。たとえば戦時動員組織である国民総力朝鮮連盟に 40 年 12 月に設置された「文化部」の活動をめぐって、朝鮮文化の独自性を維持せんとする「朝鮮有識層」と総督府の「暗闘」は続いていた（参照、宮本正明『戦時期朝鮮における「文化」問題——国民総力朝鮮連盟文化部をめぐって』赤澤史朗ほか編『年

いく。

解放後、しかしこの三人は、民族解放・社会主義の運動に復帰していく。徐・朴は林和らとともに朝鮮文学建設本部に参加して活動する²⁶。また印は、朝鮮社会科学研究所、科学者同盟などに参加している。だが、やがて朝鮮南部（48年8月、米軍占領下の南朝鮮は大韓民国として独立）で社会主義弾圧が強まると、徐・朴は「越北」する。印は49年、国家保安法違反で逮捕され、いわば再・再転向を迫られるが、50年の朝鮮戦争勃発後、朝鮮人民軍が占領するソウル市で人民委員会の候補委員となる。だが、彼らの行方はここで途絶える。あるいは戦時下に行方不明になり、あるいは粛清されたとも言われるが、消息は現在のところ不明である。

朝鮮戦争後、金が社会主義運動史の周縁で忘却され、車が「親日」と目されたのはもちろん、残りの三人（特に印）の事績も、三重の意味で公的言説や研究の対象から排除された。ひとつには戦時期の彼らの言論活動が「親日派」問題にふれるため、著作の意義が否定されてきたからである。もうひとつには「越北」など、社会主義者の経歴が「北」との強い結びつきを連想させ、韓国国是＝反共イデオロギーに強く抵触したためである。さらに、彼らが期待した

「北」においても、53年の旧南朝鮮労働党系知識人の粛清を極点として、「越北」した知識人の言論活動の痕跡は、「越北」後はおろか、解放前後の事跡に至るまで掻き消されてしまった。ここに、日中戦争期から曲折を経て続してきたひとつの言説空間とその担い手が失われた。

日中戦争期のわずかな期間に試みられた日本への問いかけは、こうして厳しい検討を経る間もなく封殺され、日本と朝鮮半島の「戦後」権力に持続する植民地主義を撃つ潜勢力をも抑圧されてきたのだと言えるだろう。

おわりに——〈翻訳〉の宛先

以上、簡単ながら五篇の論文にふれたが、これだけでも当時の朝鮮知識人が窮境のなかで選び取った独特の戦略が見えてくるだろう。日中戦争期、朝鮮の左派知識人が東亜協同体論を掛け金として内鮮一体論を読み替え、主体性／民族性の保持と社会変革への展望を抱いたその論理は、脱植民地化の実践が屈折したかたちで継続しているものと捉えるべきであり、抵抗の戦略としての機能を一定程度有していた。いうまでもなく、彼らの発言は「内鮮一体」の大前提を受け容れなくては自己の意図を公共空間に忍びこませることさえ不可能な状況でなされた、至難かつ微妙な工作であった。それゆえ、新たな読みを提示しようとする私たちもまた、安易に彼らの発言の「真意」を語ることはできない。

²⁶ ただし、解放後、印・朴は旺盛な執筆をしたにもかかわらず、徐は沈黙を守っている。解放後にも徐の論説を発表しなかった理由は不明だが、民族性の問題よりも資本主義の構造的問題を注視する日中戦争期の姿勢が特続していたとすれば、光復期の民族主義の興隆にもなじめなかったために発言を断念したのかもしれない。ではそうした徐があえて「越北」に賭けた朝鮮社会主義の夢とはどのようなものだったのか。

もちろん、彼らの発言に対する批判的吟味は、今後一層深い位相でなされなければならない。とりわけ変革の主体たらしめる自他への呼びかけは、それ自体、総力戦における動員のための有力な論理である以上、自発性の喚起が及ぼす複数の効果には細心の注意が必要だろう。しかし、自発性やそこから生まれる抵抗をひとしなみにシステム内部の相補性や循環には回収できない。ここでも問題なのは、誰が、誰に向けて、いつ発した言葉なのかという文脈である。抵抗か否か、戦略か便乗かなど、二者択一的な評価にはやる前に、まずは彼らが発言を紡ぎだし呼びかけた同時代の朝鮮—帝国—東アジアの重層する言説空間をそれぞれ丹念に再構成し、彼らの痕跡を、その絡まり合う多重空間にさらしてみるべきだろう。そのような基礎的な作業すら、近年まで必要とされてこなかったのだ。

今回の紹介に限っても、ふれられなかった論点は多い。文体や用語ひとつとっても、多分野の研究者による詳細な検討が不可欠である。現在、私たちは、より厳密な翻訳・校訂を準備しつつ、日中戦争期における朝鮮知識人の東亜協同体論に関する体系的な資料集の編集をめざしている。今回の紹介を契機として、より多くの方がこの主題に関心を持たれることを期待している。それにより、幾重もの《翻訳》によって（ようやく）届けられたこのテキストの宛先が増え、当時は不可能だった「人格対人格のそれである目的と目的の関係」（徐論文）へと

東アジアの関係性が転成することを願ってやまない²⁷。

（とべ ひであき・早稲田大学大学院）

²⁷ 幾重もの《翻訳》という場合、当時朝鮮語で書かれたテキストを日本語に訳す行為自体が、東アジアの近代以降の翻訳文化における日本語のヘゲモニーとの緊密関係をはらんだものであることを自覚せざるをえない。今回の翻訳が、日本語による思想史研究を単に「豊かにする」に留まらず、従来の研究のあり方そのものを揺るがす契機となれば幸いである。

【付記】 翻訳の定稿化と解題執筆については、以下のように作業を行った。翻訳については、2002年以來継続してきた研究会における崔真碩・渡辺さりな作成の仮訳にもとづき、あらためて崔真碩・洪宗都・米谷匡史・戸邊秀明が討議を経て定稿化し、再度研究会の検討を受けた。翻訳における過誤は4人が負うが、訳稿は崔、訳注は戸邊が最終的に整理した。解題は上記4人による定稿化の作業中の議論に基づき、戸邊がまとめ、これも研究会の検討を経たが、最終的な文責は戸邊が負っている。

《翻訳凡例》

- * 固有名詞等の一部を除き、新字体・現代仮名遣いに統一した。
- * 一部の慣用句を除き、原文の漢字はできる限り活かした。そのため、現在の使用法とニュアンスの異なる箇所もある。
- * 原文に行替えが極端に少ない場合は、意味に配慮しつつ、最小限度の行替えを行った。
- * 簡単な注記は本文中に〔 〕で示した。
- * 注はすべて訳注である。
- * 引用文についてはできる限り当時の文献にあたったが、一部確認できないものや著者が要旨をまとめている場合は原文からそのまま訳した。またいずれの場合も現代仮名遣いに統一した。
- * 目次に掲出された論文題目と本文冒頭の題目が異なる場合は、本文掲出の題目を採用した（異同のある場合は、その旨を各論文冒頭の注に示した）。